

経済統計概論レポート課題解答例

1. 以下の問に答えよ.

(ア) 標本数が50, 標本平均が3, 標本分散は4であった. このとき, 母集団平均の95%信頼区間を求めよ.

(解答例)

標本数が十分大きいので, $\frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}}$ は正規分布で近似できる. また, σ は

$\hat{\sigma} = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2}$ で近似できる. 従って, $P\left(-1.96 \leq \frac{\bar{X} - \mu}{\sigma/\sqrt{n}} \leq 1.96\right) = 0.95$ の性

質を使って95%信頼区間を構成する. ()の中を変形すると

$P\left(\bar{X} - 1.96 \frac{\hat{\sigma}}{\sqrt{n}} \leq \mu \leq \bar{X} + 1.96 \frac{\hat{\sigma}}{\sqrt{n}}\right) = 0.95$ となる. σ の推定値としてSを使用して

も良いから, 95%信頼区間は, $3 - 1.96 \frac{2}{\sqrt{50}} \leq \mu \leq 3 + 1.96 \frac{2}{\sqrt{50}}$. 計算すると,

2.45 $\leq \mu \leq$ 3.55である.

(イ) 600世帯を調査する視聴率調査で視聴率(「新選組!」初回視聴率)は26.3% <関東地区>であった, ここから母集団に対する真の視聴率の95%信頼区間を求めよ.

(解答例)

比率の推定を使用する. スライドシリーズ6の31枚目によると, nを標本数, mを視聴している世帯数とすると, 95%信頼区間は,

$$\frac{m}{n} - 1.96 \sqrt{\frac{\frac{m}{n} \left(1 - \frac{m}{n}\right)}{n}} / \sqrt{n} \leq \mu \leq \frac{m}{n} + 1.96 \sqrt{\frac{\frac{m}{n} \left(1 - \frac{m}{n}\right)}{n}} / \sqrt{n}$$

であるから, $m/n = 0.263$, $n = 600$ を代入して,

$$0.263 - 1.96 \sqrt{0.263 \times 0.737} / \sqrt{600} \leq \mu \leq 0.263 + 1.96 \sqrt{0.263 \times 0.737} / \sqrt{600}$$

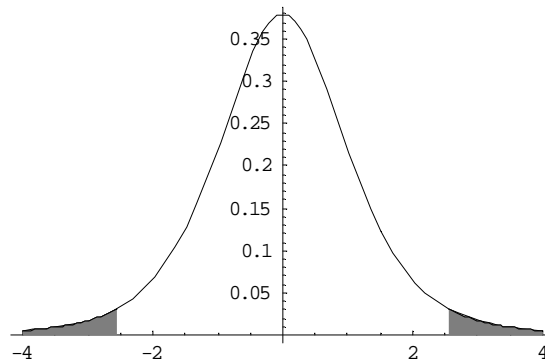
となる。計算すると $0.228 \leq \mu \leq 0.298$ であるから、95%信頼区間は22.8%から29.8%ということになる。

(ウ) 標本のデータ値は、1, 3, 2, 6, 9であった、母集団の分布は正規分布であることがわかっている。このとき、母平均の95%信頼区間を求めよ。

(解答例)

$\frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}}$ が自由度 $n-1$ の t 分布に従う。ただし、 $S^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2$ である。自由度 $(5-1)$ の t 分布の密度関数は下の通りであり、黒く塗ってある部分の確率合計は0.05である。この黒塗りの部分との境目の値は、教科書の t 分布表の自由度 (d.f.) 4の行の0.025の列を参照すればよい。参照すると ± 2.776 であるから、95%信頼

区間は、 $P\left(-2.776 \leq \frac{\bar{X} - \mu}{S/\sqrt{n}} \leq 2.776\right) = 0.95$ を元に構成すればよい。



従って、 $P\left(\bar{X} - 2.776 \frac{S}{\sqrt{n}} \leq \mu \leq \bar{X} + 2.776 \frac{S}{\sqrt{n}}\right) = 0.95$ である。標本平均は、4.2。

$$S^2 = \frac{1}{5-1} \left\{ (1-4.2)^2 + (3-4.2)^2 + (2-4.2)^2 + (6-4.2)^2 + (9-4.2)^2 \right\} \\ = 10.7$$

$S = \sqrt{10.7} = 3.27$ 、 $n=5$ を代入して、 $4.2 - 2.776 \frac{3.27}{\sqrt{5}} \leq \mu \leq 4.2 + 2.776 \frac{3.27}{\sqrt{5}}$ 。計算

すると、 $0.148 \leq \mu \leq 8.253$ である (答えは小数点以下1桁がプラスマイナス1で正解)

(工) 集団 A については標本数が 31, 平均が 10, 標本分散は 9 であった。集団 B については標本数が 51, 平均が 12, 標本分散は 16 であった。集団 A, B の母分散は等しいと仮定して, 集団 A の母平均と集団 B の母平均が等しいか, 等しくな
 いか検定を行え。

(解答例)

< 理屈 >

帰無仮説は「両集団の母平均が等しい」である。標本数が十分大きいので,

$\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \mu_{A\text{集団}}}{\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}}}, \frac{\bar{X}_{B\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}}{\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}}}$ はともに標準正規分布で近似でき無相関である。こ

こで, 添え字の「A 集団」は A 集団内で計算した標本平均, 母平均, 標本数を示し, 添え字「B 集団」は B 集団内で計算した標本平均, 母平均, 標本数を示す。

$Z_1 = \frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \mu_{A\text{集団}}}{\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}}}, Z_2 = \frac{\bar{X}_{B\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}}{\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}}}$ とおく。 $\bar{X}_{A\text{集団}} - \mu_{A\text{集団}} = (\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}})Z_1,$

$\bar{X}_{B\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}} = (\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}})Z_2$ と書き換え, 差をとると,

$(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) - (\mu_{A\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}) = (\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}})Z_1 - (\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}})Z_2$ 。さらに帰無仮説

が正しいとすると, $\mu_{A\text{集団}} = \mu_{B\text{集団}}$ であるから, 代入して,

$\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}} = (\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}})Z_1 - (\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}})Z_2$ 。

$E[\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}] = (\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}})E[Z_1] - (\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}})E[Z_2] = 0$ 。 Z_1, Z_2 は無相関だから,

ら,

$V[\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}] = \frac{\sigma^2}{n_{A\text{集団}}}V[Z_1] + \frac{\sigma^2}{n_{B\text{集団}}}V[Z_2] = \left(\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}\right)\sigma^2$ 。さらに,

$\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}} = (\sigma/\sqrt{n_{A\text{集団}}})Z_1 - (\sigma/\sqrt{n_{B\text{集団}}})Z_2$ は無相関な正規分布の線形和で近似

できるから、それ自身正規分布で近似できる。以上を総合すると、 $\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}$ は

$$N\left[0, \left(\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}\right)\sigma^2\right] \text{で近似できる。よって, } \frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{\sigma\sqrt{\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}}} \text{は標準正規分布}$$

で近似できる。はその推定値

$$\hat{\sigma}^2 = \frac{1}{n_{A\text{集団}} + n_{B\text{集団}}} \left\{ \sum_{\text{集団A}} (X_i - \bar{X}_{A\text{集団}})^2 + \sum_{\text{集団B}} (X_i - \bar{X}_{B\text{集団}})^2 \right\} \text{で推定して, 統計量は}$$

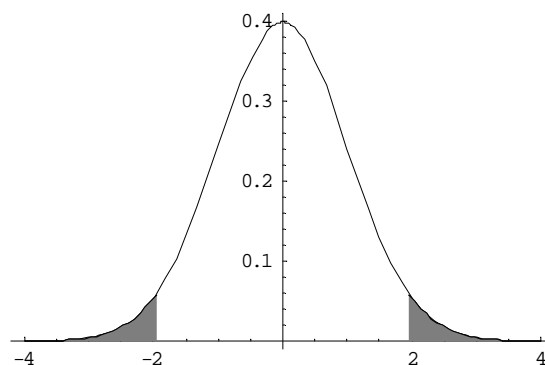
$$\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{\hat{\sigma}\sqrt{\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}}} \text{で, 境界値は標準正規分布表に基づいて決めることになる。}$$

<実際の解法>

帰無仮説は「両集団の母平均が等しい」、対立仮説は「両集団の母平均が異なる」であ

るので、両側検定となる。統計量は $\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{\hat{\sigma}\sqrt{\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}}}$ で、有意水準5%で検定すると、

境界値は帰無仮説の場合の分布の両側合計5%のはずれを考慮して決める。



上図の網掛け部が合計確率5%になるように決める。よって、 ± 1.96 が境界値である。

$$S_{A\text{集団}}^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{\text{集団A}} (X_i - \bar{X}_{A\text{集団}})^2, S_{B\text{集団}}^2 = \frac{1}{n-1} \sum_{\text{集団B}} (X_i - \bar{X}_{B\text{集団}})^2 \text{であるから,}$$

$$\begin{aligned}\hat{\sigma}^2 &= \frac{1}{n_{A\text{集団}} + n_{B\text{集団}}} \left\{ \sum_{\text{集団A}} (X_i - \bar{X}_{A\text{集団}})^2 + \sum_{\text{集団B}} (X_i - \bar{X}_{B\text{集団}})^2 \right\} \\ &= \frac{1}{n_{A\text{集団}} + n_{B\text{集団}}} \left\{ (n_{A\text{集団}} - 1)S_{A\text{集団}}^2 + (n_{B\text{集団}} - 1)S_{B\text{集団}}^2 \right\} \\ &= \frac{1}{31 + 51} \{31 \times 9 + 50 \times 16\} = 13.16\end{aligned}$$

よって、統計量の値は、
$$\frac{\bar{X}_{\text{集団A}} - \bar{X}_{\text{集団B}}}{\hat{\sigma} \sqrt{\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}}} = \frac{10 - 12}{3.63 \sqrt{\frac{1}{31} + \frac{1}{51}}} = -2.42$$
 . したがって、

統計量値 < -1.96 なので、統計量値は棄却域に入り、有意水準 5% で帰無仮説は棄却され、対立仮説が採択される。したがって、二つの集団の母平均は異なるといえる。

(オ) (エ) と同じ状況で、集団 A, B の母分散は等しいと仮定して、集団 A の母平均より集団 B の母平均が大きいかどうか検定を行え。

(解答例)

$$(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) - (\mu_{A\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}) = \left(\frac{\sigma}{\sqrt{n_{A\text{集団}}}}\right)Z_1 - \left(\frac{\sigma}{\sqrt{n_{B\text{集団}}}}\right)Z_2 \quad \text{よ り} \quad ,$$

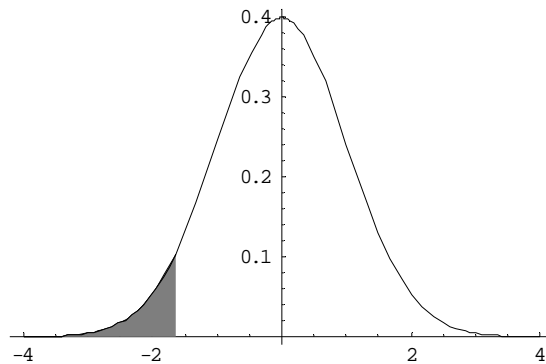
$$(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) = (\mu_{A\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}) + \left(\frac{\sigma}{\sqrt{n_{A\text{集団}}}}\right)Z_1 - \left(\frac{\sigma}{\sqrt{n_{B\text{集団}}}}\right)Z_2 \quad . \quad \text{従 っ て} \quad ,$$

$$E(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) = (\mu_{A\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}) \quad , \quad V(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) = \sigma^2 \left(\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}} \right)$$

である。対立仮説は、 $\mu_{A\text{集団}} < \mu_{B\text{集団}}$ であるから、

$$E(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) = (\mu_{A\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}) < 0 \quad \text{となり} \quad , \quad \bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}} < 0 \quad \text{の場合に棄却す}$$

るのが妥当となる(片側検定)。したがって、統計量値が負の場合に棄却することになる。数で言うと、網掛けの部分が棄却域であるから、境界値は -1.64 である。統計量値がこの値より小さい場合に帰無仮説を棄却することになる。ところが、統計量値は(エ)によると -2.42 なので棄却域に入り、帰無仮説は有意水準 5% で棄却される。



(カ) (エ)と同じ状況で，集団 A，B の母分散は等しくないと仮定して，集団 A の母平均より集団 B の母平均が等しいかどうか検定を行え．

(解答例)

< 理屈 >

$\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \mu_{A\text{集団}}}{\sigma_{A\text{集団}}/\sqrt{n_{A\text{集団}}}}$ ， $\frac{\bar{X}_{B\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}}{\sigma_{B\text{集団}}/\sqrt{n_{B\text{集団}}}}$ はともに無相関の標準正規分布で近似できる．ただ

し，母分散が異なるので，それぞれの集団の母分散を $\sigma_{A\text{集団}}^2$ ， $\sigma_{B\text{集団}}^2$ としてある．

$$Z_1 = \frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \mu_{A\text{集団}}}{\sigma_{A\text{集団}}/\sqrt{n_{A\text{集団}}}} \quad , \quad Z_2 = \frac{\bar{X}_{B\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}}{\sigma_{B\text{集団}}/\sqrt{n_{B\text{集団}}}} \quad \text{と お く .}$$

$$(\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}) - (\mu_{A\text{集団}} - \mu_{B\text{集団}}) = \frac{\sigma_{A\text{集団}}}{\sqrt{n_{A\text{集団}}}} Z_1 - \frac{\sigma_{B\text{集団}}}{\sqrt{n_{B\text{集団}}}} Z_2 \quad . \quad \text{帰 無 仮 説}$$

$$\mu_{A\text{集団}} = \mu_{B\text{集団}} \text{ の下では， } \bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}} = \frac{\sigma_{A\text{集団}}}{\sqrt{n_{A\text{集団}}}} Z_1 - \frac{\sigma_{B\text{集団}}}{\sqrt{n_{B\text{集団}}}} Z_2 \text{ である .}$$

$$E[\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}] = \frac{\sigma_{A\text{集団}}}{\sqrt{n_{A\text{集団}}}} E[Z_1] - \frac{\sigma_{B\text{集団}}}{\sqrt{n_{B\text{集団}}}} E[Z_2] = 0 \quad , \quad Z_1, Z_2 \text{ は無相関だから，}$$

$$V[\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}] = \frac{\sigma_{A\text{集団}}^2}{n_{A\text{集団}}} V[Z_1] + \frac{\sigma_{B\text{集団}}^2}{n_{B\text{集団}}} V[Z_2] = \frac{\sigma_{A\text{集団}}^2}{n_{A\text{集団}}} + \frac{\sigma_{B\text{集団}}^2}{n_{B\text{集団}}} \quad , \quad \text{ま た ，}$$

$$\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}} = \frac{\sigma_{A\text{集団}}}{\sqrt{n_{A\text{集団}}}} Z_1 - \frac{\sigma_{B\text{集団}}}{\sqrt{n_{B\text{集団}}}} Z_2 \text{は無相関な正規分布の線形和で近似できる}$$

から、それ自身正規分布で近似できる。以上を総合すると、 $\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}$ の帰無仮説

の下での分布は $N\left[0, \frac{\sigma_{A\text{集団}}^2}{n_{A\text{集団}}} + \frac{\sigma_{B\text{集団}}^2}{n_{B\text{集団}}}\right]$ で近似できる。したがって、検定統計量は、

$$\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{\sqrt{\frac{\hat{\sigma}_{A\text{集団}}^2}{n_{A\text{集団}}} + \frac{\hat{\sigma}_{B\text{集団}}^2}{n_{B\text{集団}}}}} \text{でその分布は標準正規分布ということになる。ただし、}$$

$$\hat{\sigma}_{A\text{集団}}^2 = \frac{1}{n_{A\text{集団}}} \sum (X_i - \bar{X}_A)^2, \hat{\sigma}_{B\text{集団}}^2 = \frac{1}{n_{B\text{集団}}} \sum (X_i - \bar{X}_B)^2 \text{である。}$$

< 実際の解法 >

帰無仮説は「両集団の母平均が等しい」、対立仮説は「両集団の母平均が異なる」である

るので、両側検定となる。統計量は $\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{\sqrt{\frac{\hat{\sigma}_{A\text{集団}}^2}{n_{A\text{集団}}} + \frac{\hat{\sigma}_{B\text{集団}}^2}{n_{B\text{集団}}}}}$ で、有意水準 5% で検定すると、

境界値は帰無仮説の場合の分布の両側合計 5% のはずれを考慮して決める。この時の

境界値は ± 1.96 である。統計量の値を計算すると、

$$\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{\sqrt{\frac{\hat{\sigma}_{A\text{集団}}^2}{n_{A\text{集団}}} + \frac{\hat{\sigma}_{B\text{集団}}^2}{n_{B\text{集団}}}}} = \frac{10 - 12}{\sqrt{9 \frac{30}{31} + \frac{16}{51} \frac{50}{51}}} = -2.61 \text{で、境界値の外側なので、帰無仮説を棄}$$

却する。

(キ) (エ) と同じ状況で母集団分散が集団 A と集団 B で等しいかどうか検定を行え。

(解答例)

母集団が正規分布に従うと仮定して F 検定を行う。帰無仮説： $\sigma_A^2 = \sigma_B^2$ ，対立仮説：

$\sigma_A^2 \neq \sigma_B^2$ である．統計量は，

$$\frac{S_{A\text{集団}}^2}{S_{B\text{集団}}^2} = \frac{\frac{1}{n_A - 1} \sum_{A\text{集団}}^n (X_i - \bar{X}_A)^2}{\frac{1}{n_B - 1} \sum_{B\text{集団}}^n (X_i - \bar{X}_B)^2} \cong \frac{\chi^2(n_A - 1)/(n_A - 1)}{\chi^2(n_B - 1)/(n_B - 1)} = F(n_A - 1, n_B - 1)$$

である．境界値は $F(30,50)$ の 2.5%点と 97.5%点である．教科書の表は片側検定用の表なので，両側検定用の表を作成した．表には $F(n_1, n_2)$ の 97.5%点を示した．

		分子自由度 n1																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	14	16	18	20	30	50	100
分母自由度 n2	1	647.79	799.48	864.15	899.60	921.83	937.11	948.20	956.64	963.28	968.63	976.72	982.55	986.91	990.35	993.08	1001.40	1008.10	1013.16
	2	38.51	39.00	39.17	39.25	39.30	39.33	39.36	39.37	39.39	39.40	39.41	39.43	39.44	39.44	39.45	39.46	39.48	39.49
	3	17.44	16.04	15.44	15.10	14.88	14.73	14.62	14.54	14.47	14.42	14.34	14.28	14.23	14.20	14.17	14.08	14.01	13.96
	4	12.22	10.65	9.98	9.60	9.36	9.20	9.07	8.98	8.90	8.84	8.75	8.68	8.63	8.59	8.56	8.46	8.38	8.32
	5	10.01	8.43	7.76	7.39	7.15	6.98	6.85	6.76	6.68	6.62	6.52	6.46	6.40	6.36	6.33	6.23	6.14	6.08
	6	8.81	7.26	6.60	6.23	5.99	5.82	5.70	5.60	5.52	5.46	5.37	5.30	5.24	5.20	5.17	5.07	4.98	4.92
	7	8.07	6.54	5.89	5.52	5.29	5.12	4.99	4.90	4.82	4.76	4.67	4.60	4.54	4.50	4.47	4.36	4.28	4.21
	8	7.57	6.06	5.42	5.05	4.82	4.65	4.53	4.43	4.36	4.30	4.20	4.13	4.08	4.03	4.00	3.89	3.81	3.74
	9	7.21	5.71	5.08	4.72	4.48	4.32	4.20	4.10	4.03	3.96	3.87	3.80	3.74	3.70	3.67	3.56	3.47	3.40
	10	6.94	5.46	4.83	4.47	4.24	4.07	3.95	3.85	3.78	3.72	3.62	3.55	3.50	3.45	3.42	3.31	3.22	3.15
	12	6.55	5.10	4.47	4.12	3.89	3.73	3.61	3.51	3.44	3.37	3.28	3.21	3.15	3.11	3.07	2.96	2.87	2.80
	14	6.30	4.86	4.24	3.89	3.66	3.50	3.38	3.29	3.21	3.15	3.05	2.98	2.92	2.88	2.84	2.73	2.64	2.56
	16	6.12	4.69	4.08	3.73	3.50	3.34	3.22	3.12	3.05	2.99	2.89	2.82	2.76	2.72	2.68	2.57	2.47	2.40
	18	5.98	4.56	3.95	3.61	3.38	3.22	3.10	3.01	2.93	2.87	2.77	2.70	2.64	2.60	2.56	2.44	2.35	2.27
	20	5.87	4.46	3.86	3.51	3.29	3.13	3.01	2.91	2.84	2.77	2.68	2.60	2.55	2.50	2.46	2.35	2.25	2.17
	30	5.57	4.18	3.59	3.25	3.03	2.87	2.75	2.65	2.57	2.51	2.41	2.34	2.28	2.23	2.20	2.07	1.97	1.88
	50	5.34	3.97	3.39	3.05	2.83	2.67	2.55	2.46	2.38	2.32	2.22	2.14	2.08	2.03	1.99	1.87	1.75	1.66
	100	5.18	3.83	3.25	2.92	2.70	2.54	2.42	2.32	2.24	2.18	2.08	2.00	1.94	1.89	1.85	1.71	1.59	1.48

ここから， $F(30,50)$ の 97.5%点は 1.87 ,2.5%点は $F(50,30)$ の 97.5%点の逆数なので， $1/1.97 = 0.51$ である．一方統計量の値は， $\frac{S_A^2}{S_B^2} = \frac{9}{16} = 0.56$ で，棄却域には入らないので有意水準 5 %で帰無仮説は棄却できない．従って，集団 A の分散と B の分散は異なる．したがって，等分散を仮定した平均差の検定を使う方がよい．

(ク) 集団 A は標本数が 10 ，標本平均が 6 ，標本分散は 4 ，集団 B は標本数が 5 ，標本平均が 3 ，標本分散は 1 である．集団 A,B ともに母集団の分布は正規分布で分散は等しいと仮定して，集団 A と集団 B の母平均が等しいか検定せよ．

(解答例)

帰無仮説 $\mu_{A\text{集団}} = \mu_{B\text{集団}}$ ，対立仮説 $\mu_{A\text{集団}} \neq \mu_{B\text{集団}}$ として検定を行う．統計量

$\frac{\bar{X}_{A\text{集団}} - \bar{X}_{B\text{集団}}}{S \sqrt{\frac{1}{n_{A\text{集団}}} + \frac{1}{n_{B\text{集団}}}}}$ は帰無仮説の下で自由度 $n_{A\text{集団}} + n_{B\text{集団}} - 2$ の t 分布に従う．この場

合は，自由度は $10 + 5 - 2 = 13$ である．したがって，有意水準 5% の場合の境界値は ± 2.161 である．

$$\begin{aligned} S^2 &= \frac{1}{n_A + n_B - 2} \left\{ \sum_{A\text{集団}} (X_i - \bar{X}_A)^2 + \sum_{B\text{集団}} (X_i - \bar{X}_B)^2 \right\} \\ &= \frac{1}{n_A + n_B - 2} \left\{ (n_A - 1)S_{A\text{集団}}^2 + (n_B - 1)S_{B\text{集団}}^2 \right\} \\ &= \frac{1}{13} \{9 \times 4 + 4 \times 1\} = \frac{40}{13} = 3.08 \end{aligned}$$

$$S = \sqrt{1.9} = 1.75 \text{ より，統計量の値は，} \frac{6-3}{1.75 \sqrt{\frac{1}{10} + \frac{1}{5}}} = 3.13 \text{ となり，棄却域にはいるの}$$

で，帰無仮説は棄却される．

(ケ) 600 世帯に対する視聴率調査の結果，今年の NHK 大河ドラマ「新撰組！」の初回視聴率は 26.3%，昨年「武蔵 MUSASHI」の初回視聴率は 21.7% であった（いずれも関東地区）．一般には今年大河ドラマは昨年より好調とされているが，母集団で考えた視聴率で「新撰組！」の第 1 回目が「武蔵 MUSASHI」の第 1 回目を上回っているとまでいえるかどうかを検定せよ．

(解答例)

サンプル調査数を n ，「新撰組！」の視聴世帯数 m_1 ，「武蔵 MUSASHI」の視聴世帯数を m_2 ，「新撰組！」の真の視聴率を p_1 ，「武蔵 MUSASHI」の真の視聴率を p_2 とする．帰無仮説は「二つの視聴率が等しい， $p_1 = p_2$ 」，対立仮説は「 $p_1 > p_2$ 」とと

る． $\frac{\sqrt{n}(m_1/n - p_1)}{\sqrt{p_1(1-p_1)}}$ ， $\frac{\sqrt{n}(m_2/n - p_2)}{\sqrt{p_2(1-p_2)}}$ はともに標準正規分布する．

$$Z_1 = \frac{\sqrt{n}(m_1/n - p_1)}{\sqrt{p_1(1-p_1)}}, \quad Z_2 = \frac{\sqrt{n}(m_2/n - p_2)}{\sqrt{p_2(1-p_2)}} \text{ とすると，}$$

$$\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n} = (p_1 - p_2) + \left(\frac{\sqrt{p_1(1-p_1)}}{\sqrt{n}} Z_1 - \frac{\sqrt{p_2(1-p_2)}}{\sqrt{n}} Z_2 \right)$$

であるが,

$$\begin{aligned} E\left[\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n}\right] &= (p_1 - p_2) + \left(\frac{\sqrt{p_1(1-p_1)}}{\sqrt{n}} E[Z_1] - \frac{\sqrt{p_2(1-p_2)}}{\sqrt{n}} E[Z_2] \right) \\ &= p_1 - p_2 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} V\left[\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n}\right] &= \left(\frac{p_1(1-p_1)}{n} V[Z_1] + \frac{p_2(1-p_2)}{n} V[Z_2] \right) \\ &= \frac{p_1(1-p_1) + p_2(1-p_2)}{n} \end{aligned}$$

であるから,

$$\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n} \cong N\left(p_1 - p_2, \frac{p_1(1-p_1) + p_2(1-p_2)}{n}\right)$$

である。帰無仮説 $p_1 = p_2$ の下では, $\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n} \cong N\left(0, \frac{p_1(1-p_1) + p_2(1-p_2)}{n}\right)$ となる。

ここから, $\left(\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n}\right) / \sqrt{\frac{p_1(1-p_1) + p_2(1-p_2)}{n}} \cong N(0,1)$ となる。 p_1, p_2 の推定値は,

それぞれ $m_1/n, m_2/n$ とすればよいから, 検定統計量は,

$$\begin{aligned} &\left(\frac{m_1}{n} - \frac{m_2}{n}\right) / \sqrt{\frac{m_1/n(1-m_1/n) + m_2/n(1-m_2/n)}{n}} \\ &= (0.263 - 0.217) / \sqrt{\frac{0.263 \times 0.737 + 0.217 \times 0.783}{600}} = 1.87 \end{aligned}$$

である, 有意水準 5% とすれば, これが 1.64 を上回るかである。この場合, 棄却域に入っているので, 帰無仮説は棄却でき, 「新撰組!」は「MUSASHI」の初回視聴率を上回っている。

(コ) 今度は昔の幕末を扱った大河ドラマと比較する。600世帯に対する視聴率調査

の結果, 今年のNHK大河ドラマ「新撰組!」の初回視聴率は26.3%, 197

4年の「勝海舟」の初回視聴率は430世帯に対する視聴率調査の結果、30.5%であった。母集団で考えた視聴率で「勝海舟」の第1回目が「新撰組！」の第1回目を上回っているとまでいえるかどうか検定せよ。

(解答例)

帰無仮説は「二つの視聴率が等しい, $p_1 = p_2$ 」, 対立仮説は「 $p_1 < p_2$ 」である。

(ケ) とほぼ同様であるが, 調査世帯数の変化を考慮する必要がある。現在の調査世帯数を n_1 , 74年当時の調査世帯数を n_2 とすると,

$$\frac{m_1}{n_1} - \frac{m_2}{n_2} = (p_1 - p_2) + \left(\frac{\sqrt{p_1(1-p_1)}}{\sqrt{n_1}} Z_1 - \frac{\sqrt{p_2(1-p_2)}}{\sqrt{n_2}} Z_2 \right)$$

となり, 帰無仮説が正しければ, $\left(\frac{m_1}{n_1} - \frac{m_2}{n_2} \right) / \sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{n_1} + \frac{p_2(1-p_2)}{n_2}} \cong N(0,1)$ と

なる。 p_1, p_2 の推定値は, それぞれ $m_1/n, m_2/n$ とすればよいので, 統計量は

$$\left(\frac{m_1}{n_1} - \frac{m_2}{n_2} \right) / \sqrt{\frac{m_1/n_1(1-m_1/n_1)}{n_1} + \frac{m_2/n_2(1-m_2/n_2)}{n_2}}$$

である。境界値は片側検定と

なり, 対立仮説の下では検定統計量の分子負になりがちであるから, 棄却域は負の範囲となる。具体的には, 有意水準を5%とすれば, 標準正規分布の95%点が境界値となる。したがって, -1.64である。統計量の値は,

$$\begin{aligned} & \left(\frac{m_1}{n_1} - \frac{m_2}{n_2} \right) / \sqrt{\frac{m_1/n_1(1-m_1/n_1)}{n_1} + \frac{m_2/n_2(1-m_2/n_2)}{n_2}} \\ & = (0.263 - 0.305) / \sqrt{\frac{0.263 \times 0.737}{600} + \frac{0.305 \times 0.695}{430}} = -1.47 \end{aligned}$$

となり, 「新撰組！」の初回視聴率を「勝海舟」の初回視聴率が上回ったとまではいえない。

2. 相関係数の意味について以下の手順に従って考察せよ。

(ア) 2次元ベクトル $\vec{x} = (x_1, x_2)$ と $\vec{y} = (y_1, y_2)$ との内積は $\vec{x} \cdot \vec{y} = x_1 y_1 + x_2 y_2$ である。また、このふたつのベクトルのなす角を θ とすると、

$$\cos \theta = \frac{\vec{x} \cdot \vec{y}}{|\vec{x}| |\vec{y}|} = \frac{x_1 y_1 + x_2 y_2}{\sqrt{x_1^2 + x_2^2} \sqrt{y_1^2 + y_2^2}}$$

属性2の値の標本相関係数を式で表し答えよ。

	属性1の値	属性2の値
標本1	x_1	y_1
標本2	x_2	y_2

(答え)

\bar{x}, \bar{y} を x, y のそれぞれの標本平均とすると、

$$r_{xy} = \frac{(x_1 - \bar{x})(y_1 - \bar{y}) + (x_2 - \bar{x})(y_2 - \bar{y})}{\sqrt{(x_1 - \bar{x})^2 + (x_2 - \bar{x})^2} \sqrt{(y_1 - \bar{y})^2 + (y_2 - \bar{y})^2}}$$

(イ) (ア) で求めた属性1と属性2の値の標本相関係数の式から、標本相関係数はどのようなベクトルどうしの角の \cos とみなせるか答えよ。

(答え)

属性1の値からその標本平均を引いた値のベクトルと、属性2の値からその標本平均を引いた値のベクトルとのなす角の \cos である。

(ウ) (イ) の結果から、標本相関係数が -1 から 1 の間にあることと、属性1と属性2の間の関係が深いとなぜ標本相関係数の絶対値が大きくなるかを説明せよ。また、標本相関係数が 1 になる場合、-1 になる場合はそれぞれどんな場合か答えよ。

(答え)

$-1 \leq \cos \theta \leq 1$ より、相関係数は -1 から 1 の間になる。属性1と属性2の間の関係が深い

と、属性 1 の値からその標本平均を引いた値のベクトルと、属性 2 の値からその標本平均を引いた値のベクトルが似てくる。ということは、それらのなす角が小さくなるか、どちらかのベクトルを逆にとったベクトルとのなす角が小さくなる。前者の場合、 \cos の値は大きくなり 1 に近い、後者の場合、 \cos の値は小さくなり - 1 にちかい。いずれの場合も、絶対値が大きくなる。標本相関係数が 1 になる場合は、二つのベクトルが平行で同じ方向であるから、すなわち、 $(y_i - \bar{y}) = \beta(x_i - \bar{x})$ ($\beta > 0$) となる場合である。つまり、 $y_i = \beta(x_i - \bar{x}) + \bar{y}$ ($\beta > 0$) となり、 y が x の一次式で完全にかけ、一次式の傾きがプラスの場合である。標本相関係数が - 1 になる場合は、二つのベクトルが平行で逆方向であるから、すなわち、 $(y_i - \bar{y}) = \beta(x_i - \bar{x})$ ($\beta < 0$) となる場合である。つまり、 $(y_i - \bar{y}) = \beta(x_i - \bar{x})$ ($\beta < 0$) となり、 y が x の一次式で完全にかけ、その一次式の傾きが負の場合である。

(エ) (ア) を n 次元ベクトルに拡張すると、 n 次元ベクトル $\vec{x} = (x_1, x_2, \dots, x_n)$ と $\vec{y} = (y_1, y_2, \dots, y_n)$ との内積は、 $\vec{x} \cdot \vec{y} = x_1 y_1 + x_2 y_2 + \dots + x_n y_n$ である。また、この二つのベクトルのなす角をとると

$$\cos \theta = \frac{\vec{x} \cdot \vec{y}}{|\vec{x}| |\vec{y}|} = \frac{x_1 y_1 + x_2 y_2 + \dots + x_n y_n}{\sqrt{x_1^2 + x_2^2 + \dots + x_n^2} \sqrt{y_1^2 + y_2^2 + \dots + y_n^2}}$$

関係数はどのようなベクトルどうしの角の \cos とみなせるか答えよ。

属性 1 の値からその標本平均を引いた値のベクトルと、属性 2 の値からその標本平均を引いた値のベクトルとのなす角の \cos である。ただ、 n 次元に拡張されているので、データの標本数も 2 より大きくてもよくなる。

(オ) 二つの n 次元ベクトル $\vec{x} = (x_1, x_2, \dots, x_n)$ と $\vec{y} = (y_1, y_2, \dots, y_n)$ において、 $\vec{y} = (y_1, y_2, \dots, y_n)$ の $\vec{x} = (x_1, x_2, \dots, x_n)$ に対する射影は

$$P(\bar{y}|\bar{x}) = \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{x} = \frac{|\bar{y}| \cos \theta}{|\bar{x}|} \bar{x} \text{ である . このとき , } \bar{e} = \bar{y} - P(\bar{y}|\bar{x}) \text{ とすると , } \bar{e} \cdot \bar{x} = 0$$

であることを示せ . さらに , $|\bar{y}|^2 = |P(\bar{y}|\bar{x})|^2 + |\bar{e}|^2$ であることを示せ . そして , $\cos^2 \theta$ を $|\bar{y}|^2, |\bar{e}|^2$, 及び , $|\bar{y}|^2, |P(\bar{y}|\bar{x})|^2$ で表せ .

(解答)

$$\bar{e} \cdot \bar{x} = \{\bar{y} - P(\bar{y}|\bar{x})\} \cdot \bar{x} = \left\{ \bar{y} - \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{x} \right\} \cdot \bar{x} = \bar{x} \cdot \bar{y} - \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{x} \cdot \bar{x} .$$

$$\bar{x} \cdot \bar{x} = |\bar{x}|^2 \text{ より , } \bar{e} \cdot \bar{x} = \bar{x} \cdot \bar{y} - \bar{x} \cdot \bar{y} = 0$$

$$\bar{y} = P(\bar{y}|\bar{x}) + \bar{e} \text{ であるから ,}$$

$$|\bar{y}|^2 = \bar{y} \cdot \bar{y} = \{P(\bar{y}|\bar{x}) + \bar{e}\} \cdot \{P(\bar{y}|\bar{x}) + \bar{e}\} = P(\bar{y}|\bar{x}) \cdot P(\bar{y}|\bar{x}) + P(\bar{y}|\bar{x}) \cdot \bar{e} + \bar{e} \cdot P(\bar{y}|\bar{x}) + \bar{e} \cdot \bar{e}$$

$$\text{ところが , } P(\bar{y}|\bar{x}) \cdot \bar{e} = \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{x} \cdot \bar{e} = 0 \text{ , } \bar{e} \cdot P(\bar{y}|\bar{x}) = \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{e} \cdot \bar{x} = 0 \text{ , } P(\bar{y}|\bar{x}) \cdot P(\bar{y}|\bar{x}) = |P(\bar{y}|\bar{x})|^2 \text{ ,}$$

$$\bar{e} \cdot \bar{e} = |\bar{e}|^2 \text{ であるから , } |\bar{y}|^2 = |P(\bar{y}|\bar{x})|^2 + |\bar{e}|^2 .$$

$$P(\bar{y}|\bar{x}) = \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{x} = \frac{|\bar{y}| \cos \theta}{|\bar{x}|} \bar{x} \text{ より , } |P(\bar{y}|\bar{x})|^2 = \frac{|\bar{y}|^2 \cos^2 \theta}{|\bar{x}|^2} |\bar{x}|^2 . \text{ したがって ,}$$

$$\cos^2 \theta = \frac{|P(\bar{y}|\bar{x})|^2}{|\bar{y}|^2} = \frac{|\bar{y}|^2 - |\bar{e}|^2}{|\bar{y}|^2} = 1 - \frac{|\bar{e}|^2}{|\bar{y}|^2} .$$

(カ) (工) と (オ) を総合すると ,

$$(y_1 - \bar{y}, y_2 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y}) = \left(\frac{\quad}{\quad} \right) (x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x}) + \bar{e}$$

ただし , \bar{e} と $(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ の標本相関係数が 0 としたとき . $r_{x,y}^2$ を

$$\sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2 \text{ と } \sum_{i=1}^n e_i^2 \text{ で表すと (} \quad \quad \quad \text{) である . () 内を埋めよ .}$$

$\bar{x} = (x_1 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$, $\bar{y} = (y_1 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y})$ とおいて, $\bar{y} = P(\bar{y}|\bar{x}) + \bar{e}$ を考え

$$\text{ると, } P(\bar{y}|\bar{x}) = \frac{\bar{x} \cdot \bar{y}}{|\bar{x}|^2} \bar{x} = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} (x_1 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x}) \text{ であるから,}$$

$$(y_1 - \bar{y}, y_2 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y}) = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} (x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x}) + \bar{e} .$$

$$\text{このとき, } \bar{e} \text{ の各要素 } e_i \text{ は, } e_i = y_i - \bar{y} - \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} (x_i - \bar{x}) \text{ となる. } \bar{e}$$

の各要素をデータ値とみたときの標本平均は,

$$\begin{aligned} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n e_i &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y}) - \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x}) \\ &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n y_i - \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \bar{y} - \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} \left\{ \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i - \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \bar{x} \right\} \\ &= \bar{y} - \frac{1}{n} (n\bar{y}) - \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} \left(\bar{x} - \frac{1}{n} n\bar{x} \right) \\ &= 0 \end{aligned}$$

よって, \bar{e} と $(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ の標本相関係数は,

$$\bar{e} \cdot \bar{x} = \sum_{i=1}^n e_i (x_i - \bar{x}) = 0 \text{ より,}$$

$$\frac{\sum_{i=1}^n (e_i - \bar{e})(x_i - \bar{x})}{\sqrt{\sum_{i=1}^n (e_i - \bar{e})^2} \sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}} = \frac{\sum_{i=1}^n e_i (x_i - \bar{x})}{\sqrt{\sum_{i=1}^n e_i^2} \sqrt{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}} = 0$$

となって、題意を満たす。

$r_{x,y}^2$ は、(エ)の答えより、 $\vec{x} = (x_1 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ 、 $\vec{y} = (y_1 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y})$ とおき、二つのベクトルのなす角 θ としたときの、 $\cos^2 \theta$ であるから、(オ)の答え

より、 $r_{x,y}^2 = \cos^2 \theta = \frac{|\vec{y}|^2 - |\vec{e}|^2}{|\vec{y}|^2} = 1 - \frac{|\vec{e}|^2}{|\vec{y}|^2}$ となる。 $|\vec{y}|^2 = \sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2$ 、

$$|\vec{e}|^2 = \sum_{i=1}^n e_i^2 \text{ であるから、} r_{x,y}^2 = \cos^2 \theta = 1 - \frac{|\vec{e}|^2}{|\vec{y}|^2} = 1 - \frac{\sum_{i=1}^n e_i^2}{\sum_{i=1}^n (y_i - \bar{y})^2}$$

(キ) $\sum_{i=1}^n \{(y_i - \bar{y}) - \beta(x_i - \bar{x})\}^2$ を最小にする β を求めると、 $(y_1 - \bar{y}, y_2 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y})$ というベクトルの先端と $(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ というベクトル上の点 $\beta(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ を結んだ距離を最小にする β を求める問題に還元できるので、 β は () である。

高校の問題であるとおり、ある点とある直線上の点との距離を最小にする点は、その点からその直線への垂線をおろしたいわゆる垂線の足である。この問題では、点の座標が、 $(y_1 - \bar{y}, y_2 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y})$ 、直線上の点の座標が、 $\beta(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ となっていると考える。垂線の足では、垂線を表すベクトル $[y_1 - \bar{y} - \beta(x_1 - \bar{x}), \dots, y_n - \bar{y} - \beta(x_n - \bar{x})]$ と直線上のベクトル(直線方向ベクトル) $(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ が直交する。つまり、垂線の足は $(y_1 - \bar{y}, y_2 - \bar{y}, \dots, y_n - \bar{y})$ の $(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x})$ に対する射影と一致している。よって、

$$\beta(x_1 - \bar{x}, x_2 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x}) = \frac{\vec{x} \cdot \vec{y}}{|\vec{x}|^2} \vec{x} = \frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} (x_1 - \bar{x}, \dots, x_n - \bar{x}) \text{ となり、}$$

$\sum_{i=1}^n \{(y_i - \bar{y}) - \beta(x_i - \bar{x})\}^2$ を最小にする は, $\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2}$ となる .